
地縛霊の故意無き殺人

kotorinakisekai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地縛霊の故意無き殺人

【NZコード】

N8845P

【作者名】

kotorinakisekai

【あらすじ】

何もすることが無くて暇だった。何処にも行くことができなくて暇だった。だからその地縛霊は人間観察をよくしていた。そんなある夜のこと。地縛霊のいる道を酔っ払いが通りかかった……。

【この作品は他サイトと一重投稿しています】

特に何もない道に少女が一人いた。今は夜中と言つていい時間だ。こんな時間に少女が外に一人でいるのは危ない。

だが、この少女は普通の少女ではない。

姿はあってもその体に触ることはできない。そもそも、その姿すら見ることができるものすら限られている。その少女は幽霊なのだ。

> 125974 — 3370 <

少女は死んだばかりだった。長いことここにぼんやりと座つているうちに、自分は死んだのだと何となく理解した。ここに座り込む直前の光景を思い出そうとすると頭が痛くなる。後ろから大きなクラクションを鳴らされていたのは覚えているのだが……。とにかく自分は死んでいるのだ。

少女は自分が死んだことを理解すると、家に帰りたくなった。しかしいざ立ち上がり家に帰ろうとすると、数歩歩いただけで身体が動かなくなつてしまつた。ひどく疲れやすい体なのかと思つて休んでみても前には進めなかつた。

しかし、さつきまで自分が居た場所に戻ると簡単に戻ることができた。少女はここから動くことができないのだということも理解した。

不思議と涙は出なかつた。それに、暗闇の中に一人きりでもそれほど怖いとは思わなかつた。闇屋幽霊を信じるのは、自分が生きていて、それらと接触して死んでしまうことを無意識に考えて恐怖を覚えるのだ。死んでしまつた少女が今更暗闇を恐れる訳がない。

『幽霊が怖くなつたのは自分も幽霊になつたからか……』

少女がそんなことを考えながら夜空を見上げていた。昼間なら人がそれなりに通つていて退屈しないのだが、夜中になるとそういう

かない。カエルの合唱を聞きながら夜空を見上げているだけなので暇でしようがない。

すると、そんな少女のところに男の人が一人やつてきた。その男はひどく酔っ払っていて、ふらふらしながらこちらに歩いてくる。良い暇つぶしができたと思い、少女はその男のことを観察し始めた。男は陽気に鼻歌を歌いながらこちらに向かってくる。相手に聞こえはしないだろうが、それに合わせて少女も歌う。

男が女のこの前を通り過ぎようとすると、男は急に足をもつれさせて少女に向かつて倒れ込んできた。少女は一瞬驚いたが、成人男性の体の重さがのしかかつてくることはなかつた。男の体は少女の体をすり抜けてしまつたのだ。思えば少女は何も触れるることはできなかつたのだ。人の体を通り抜けるのは気味が悪いから、一度もしたことはなかつたのだが……。

『危ないなー』

少女は誰にも聞こえない声でそう呟いて男の人を見下ろした。すると様子がおかしい。身体がぐくぐく震えているし、息が荒い。ついにはうめき声をあげて転がりまわり始めた。

身体に触れられない少女に何ができる訳もない。ただオロオロしながら男の姿を見つめるだけ……。その男はそのまま死んでしまい、翌朝ここを通つた人に見つけられた。

『嫌なもの見ちゃつた』

少女はそう思いながらその日過ごしていた。

人が死ぬ様子というのを見ていて気持ちが悪い。あんなに苦しまれたらなおさらだ。あんな風になつたのは酒を飲んでいたからに違いない。お酒は悪いものだから大きくなつても飲まないようにして……。もう大きくなれないんだつた。

少女はそんな風に考えて笑つた。笑つたことによつて少し気が楽

になつた。

少女は近くにまた男の人が居るのを見つけた。その男の人は酒を飲んではいない。しかし、ただの通行人という訳でもなかつた。棒を持つて猫をいじめているのである。

その男は、猫のをひもで木に縛り付けていた。猫の方に見覚えがある。このあたりでは有名ないだずら猫だ。男の方も猫の悪行を並べながら棒でつついている。

いくら猫が悪いとは言つても見ていて気持ちのいい光景ではない。男が立っているのは少女の手が届く範囲だつた。触れはしないが腹が立つのだから仕方がない。気休めのつもりで女の子は男を殴つた。当然それは空振りする。

しかし、空ぶつた後男の様子がおかしくなり始めた。突然膝をついて苦しみ始めたのだ。それは昨日の男の様子によく似ていた。

『まさか……』

少女は嫌な予感がした。もしかして、自分が触れると人を殺してしまうのではないか？しかし、今まで他の動物を触れようとしてもその動物が死んだことは無かつた。だが、現実に男は苦しがつている。ついに男は転がりまわつて泡を吹き始めた。そしてそのまま、動かなくなつてしまつた。

その男の死体も通行人が見つけた。少女はそれを見ながらショックを受けていた。

『私が殺してしまつた……。しかも一人も？　じゃあ私は犯罪者？　殺人犯なの？』

もう、歌つても馬鹿なことを考えても気が休まるることは無かつた。罪の意識が少女を苛む。

その日の夜。少女は始めて泣いた。自分が死んだのだと分かつた時すらなかつたのに、人を殺してしまつたのだと分かると涙が止まらなかつた。大きな罪を犯したことが無いことだけが自慢だつたと言つた……。

そんな少女のいるところにまた別の男がやつてきた。……酔っ払っている。

少女はその男から逃げ出したかった。しかし体は動いてくれない。何事もなく通り過ぎることを祈る。そんな少女の祈りを知らずに、男は少女の前を通り過ぎようとする。

『どうやらこのまま通り過ぎてくれそうだ……』

少女がそう呟いた瞬間、男が大きくふらついて少女に向かって倒れ込む。少女はそれを避けようとする。だが……身体が動いてくれなかつた。

男は前の一人と同じように苦しみ出す。少女はそれを見て悲鳴を上げる。しかし、結局何もできずにその男は死んでしまつた。

次の日、町の人たちが少女のいる道に集まつた。除霊をするのだと言つ。

この場所には車にひかれて死んだ少女の惡靈が取り付いている。その少女が恨みを晴らすために、片っぱしから通行人を殺しているのだと言つのだ。

少女が否定する言葉を叫んでも誰にも聞こえない。

ついに霊能力者がやってきて除霊が始まつた。

「この道に取りつく惡靈よ。自分の悲しみのために次々に人の命を奪つた罪を、ここで償つてもらつ」

霊能力者は一方的にそう告げるとお経を唱え始めた。生きている間はただ退屈なだけだったお経が、今の少女にはガラスを爪で引つ搔くような音に聞こえた。その上体中に激痛が走る。

『痛い！ 痛い！ 痛い！ 違うの！ 私は殺したくて殺したんじゃないの！ 身体が触れただけで殺してしまって誰が思うの！ 最後の人には至つては避けようとした！ でも身体が動いてくれなかつたのよ！』

少女の悲痛な叫び声は誰にも届かない……。

「そこまでです」

靈能力者の後ろからそう叫ぶ声が聞こえた。

そう叫んだのは寺の坊主だった。

「悪靈はいなくなりました。これ以上続けても意味がありません」
靈能力者はまだ例は完全に祓われていないと主張したが、坊主が
除靈料は払うというと靈能力者はあっさりと引き下がつた。
町の人たちは町の人たちで、坊主がそういうならそうなのだろう
と、納得して解散して行つた。しかし、坊主はその場所に残つて、
少女のいる場所を見つめる。

「苦しかつたですね」

まだ身体が十分に動かない少女は顔だけを坊主に向ける。

『わ……たしが……見えるの?』

「見えますよ。途中からあなたが悪靈でないのは分かりました。町
の人から責める言葉をかけられるのはさぞ辛かつたでしょう」
坊主がそういうて少女の頭に手を伸ばす。とつさに少女は避けよ
うとするが間に合わない。

(お坊さんも死んでしまう)

だがそれはならなかつた。坊主の手は少女の頭に触れて、優しく
頭を撫でてくれた。

「あなたを癒すためのお経を唱えさせてください。あなたが天国へ
いけるように」

『……ありがとうございます』

少女の靈は最後に罪を坊主に許してもらつて、成仏した。

(後書き)

ジャンルが分からなかつたのでその他にしました。間違つていいたらすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8845p/>

地縛霊の故意無き殺人

2011年8月3日03時23分発行